

はじめの一步

李大美

2021年9月2日、人生で初めて子どもと二人で小倉駅のロータリーに立った。理由は朝鮮高校無償化実現の為の木曜行動を始めたからだ。

昨年、最高裁の判決で敗訴が決まった。私たちの声は司法には届かなかった。日本政府に対し憤りを感じるとともに、この差別により子どもたちが傷つけられてしまうのが悲しかった。

悶々とした日々を過ごす中、コロナ禍も相まって裁判が終わった後、何事もなかったかのように日常が過ぎていった。裁判の日々が消えていくことが怖かった。

3月に子どもを出産した。初めての子育てに追われる日々が始まった。

毎日、子どもと過ごしながらかある時から湧いてくるおもいがあった。裁判が不当に終わり、間違っていると思いながらも、何もできてない自分自身に対しモヤモヤを感じていた。

これから子どもたちが育つ社会に、差別や偏見がはびこっているという現実を目の前にし、私にできることは何かを考えた。

コロナだから、産したからなんて言い訳にならない。自分が声をあげなきゃとおもっているのなら動かない。

とにかくやってみようとおもい、木曜行動を娘と二人で始めた。初めてプラカードを持って立った時は通り過ぎる人の視線が怖く、まともに顔を上げられなかった。私たちを在日朝鮮人の置かれている立場をはっきり知る瞬間だった。同時に自分の弱さを嫌というほど思い知った。でも抱っこ紐の中で眠る娘の顔に支えられた。

木曜に立ち始めてから3ヶ月、私がマイクを持って発言していたら、マイクに興味を持ち娘が触ってくる。飽きて抱っこ紐の中でくねくね動き出すときもある。ベビーカーを嫌がるので抱っこ紐での移動は娘の体重が増えるほどに体に堪えるが、日差しが強い日も雨の日も一緒に街頭に立ってくれている娘がいたから頑張れている。

街頭に立っていると厳しいことを口にする人もいる。その反面、励ましの声をかけてくれる日本人や同胞たちもいる。また共感してくれる仲間たちが仕事の合間を縫って一緒に街頭に立ってくれる。

それがどれだけ支えになっているのかわからない。初めは娘と二人だけで心細かったが今は隣にいても心を共にしてくれる仲間がいるから心強い。プラカードを持ち、街頭に立つことが何の意味があるのだという人もいる。

でも私たちもこの国に生きている。だから声を上げて知ってもらいたい、伝えたい。声を失えば私たちの存在は消えてしまう。声を上げ続ければ誰かに届くかもしれないし、また知ってもらえるきっかけになるかもしれない。一人でも沢山の人の目に耳に私たちの声が届いてくれることが差別や偏見を無くす一歩になると願っている。

これからも無償化が実現するその日まで地道に木曜行動を続けていこうと思う。